

「また明日。」

有田川町立吉備中学校 二年 江川 好香

「言葉とは何だろうか。」そう言われても「言葉とはこうです。」という明確な答えのようなものは出てきにくい。それは、言葉がこの世界を構成しているものの一部として私達の生活に溶け込んでいるからだだろう。ある時には人を勇気づけ、またある時には人を傷つける。そんな言葉と私達はどのように向き合えば良いのだろうか。

私はある日の休日、スマホでニュースの記事を読んでいた。すると、私の目に一つの記事が飛び込んできた。それは“ある有名人が自殺によって亡くなった”という内容であった。そしてその自殺の原因は誹謗中傷だった。私はこの時こう思った。匿名で自分の正体が分からないからといって、他人を罵倒し、誰か一人が非難を始めると、その非難にのっかる。こういう人達は自分が発した言葉に責任を持とうとせず、自分がその人より優位な位置に立っていると錯覚している人達なんだなと。それと同時に、私達が普段使っている言葉は、人の命をも奪ってしまうほどの力を持っているのだと気づき、少し恐怖を覚えた。

誰かからの言葉によって自ら命を絶ってしまう、そんな悲しいニュースを多く目にする中、私はある一人の少女の話を見つけた。その少女は中学生で、学校ではいじめを受け、先生は見て見ぬふり、勇気を振り絞って親に打ち明けても、まともに聞いてもらえずにいた。それでも彼女は、中学校はあと三年間なのだから耐えればいいのだと思っていた。でも、日に日にいじめはエスカレートしていった。彼女は「何で私がいじめられないといけないのだろう。パパやママは私の話を聞いてくれない、先生は見て見ぬ振りばかり。誰も私の味方なんていない。」そう思ったそうだ。そして彼女はついに、明日命を絶とうと決意した。彼女が命を絶つ日、ある一人の少女が彼女の前に現れた。その少女は、小学校の頃の親友で、中学校に入り、クラスが離れてからあまり接点がなかった。二人は、久しぶりに話をした。そして彼女は親友に、涙ながらにいじめを受けていることを話したのだ。今日、死のうと思っていることも。その後、親友は何も言わず「そっか。」とだけ言っただけらしい。そして別れ際、ずっと静かだった親友が彼女にこう言った。「また明日。」音にすれば五文字、文字にすれば四文字。たったそれだけの言葉が、彼女がこの世から去ることを引き止めた。彼女はこの時、こう思ったそうだ。「生きよう。」例え親や先生が味方してくれなくとも、クラスでいじめられようとも、誰か一人でも、私が明日という日に存在する事を認めてくれるのなら「生きよう」と。私がここで言いたいのは「自殺はダメだ。」ということや、「いじめはいけないことだ。」ということではなく、人の命を奪ってしまうような力を持つ言葉には、それと同じくらい、人の命を救う力もあるのだということだ。

私は、言葉は扱い方が難しい「道具」なのではないかと思う。例えば、私達が普段使う包丁、それは料理を作ることでもできるが、扱い方を誤れば人を傷つける凶器にも

なる。それと同じように、言葉は、扱い方によって人を傷つけたり、勇気づけたり、希望を与えたりと、色々な力を持つ「道具」に変化する。だからこそ、言葉をただの五十音の組み合わせだと思わないでほしい。同じ言葉でも、発する人によって、他人に与える影響は違う。また、それを受け取る側によっても、その言葉をどう捉えるのかは違う。言葉はただ存在するだけのものではない。人が自分の中で最もコントロールしにくい感情の影響をとて多く受けてしまうからだ。だからこそ、言葉は扱いが難しく同時に美しく、そして残酷だ。

私は十四年間の人生で、言葉に何度も救われた。大きな舞台に立つ前の親友や母からの「あなたならできる。」、周りの目ばかりを気にし、苦しんでいた時の父からの「他人は思ってるよりも、お前のことを見ていない。大丈夫。」、そんな言葉達を、次は私が誰かに与えたい。何でもない言葉の一つが、力を持ち、時には誰かの人生を暗闇にしたり、時には誰かの人生を支えたりして、その人の一部になることもある。そんな「言葉」を理解したり伝えたりできる能力を持っているのだから、どうせなら人の心を明るくする為に遣いたい。たとえ、誰かの命を救うなんていう、大きなことができなくとも、日常の小さな言葉で、誰かを笑顔にしたり、勇気づけたりできたらいいなと思う。

インターネットが普及し、私達は暮らしの中でより多く、他人の言葉に触れるようになった。そんな現代社会で言葉の使い方を誤れば、どのような世の中になるのだろうか。また、一人一人がたった一言だとしても言葉に責任を持ち、正しく遣えば、世の中はどのように変化していくのだろうか。一度、考えてみてほしい。